



No. 31

ブランチ合宿のご案内

第9回東京ブランチ合宿研修会をつぎのとおり開催いたします。みなさんのご参加を心からお待ち申し上げます。

- と き 1996年2月17日(土) 1pm~18日(日) 3pm
ところ 神奈川県綾瀬市・石川島研修センター
会 費 辛13,000(宿泊費・食事代込み)
定 員 合計80名(先着順)
内 容 今回はややゆったりしたスケジュールで進めます(Cクラスを除く)。
・SCD講習……
 (A)クラス。ベイシック・ステップを中心に。
 (B)クラス。Advanced/Very Advancedクラス。
 (C)クラス。予備試験合格者で、指導者資格試験をめざす人のクラス。
 注：各クラスとも人数調整のため他のクラスに移っていただくことがあります。
・インフォーマル・ダンシング。
・ブランチ在庫品セール。
- 指 導 東京ブランチ・ティーチャー
運 営 東京ブランチ役員およびボランティア
- 申込方法 同封の郵便振替用紙(郵便局そなえつけの用紙でも可)の通信欄に『合宿参加希望(〇〇)クラス』と書いて、会費とともに
 口座番号 00160-9- 64023
 加入者名 RSCDS東京ブランチ
あて個人個人で申し込んでください。払込みの控は合宿案内のチラシ受領まで保存してください。
- 申込締切 96年1月19日(消印有効)または定員になりしだい締切。

ブランチ・クラス

96年1月～3月の予定は

(確定) 1月20日(土) 6.00-8.40 PM 二階堂芸術スポーツホール(明大前)

(予定) 2月 3日(土) } 決まりしだいお知らせします。

(予定) 3月 2日(土) }

1月～3月の講師は鳥山豊喜さんです。

ロバート&バーバラ・マコーエン夫妻再来日

92年10月に来日し、ブランチ合宿でダンシングおよびSCD音楽に深い印象をのこした米国ボストン・ブランチのロバート&バーバラ・マコーエン夫妻が、東京都墨田区の招きで再びやってきます。時期は96年3月中旬。東京ブランチもつぎのとおり夫妻との研修会を計画しました。

3月16日(土) 1:00～4:30pm

墨田区曳舟文化センター(東武曳舟駅または京成曳舟駅5分)

費用および研修内容などくわしいことはあらためてご連絡します。

ブルゴーニュでパリ・ブランチのウィークエンド

パリ・ブランチから『ダンシング・イン・ディジョン』と称するウィークエンド・スクールの案内書が届いています。

日時: 96年4月6日(土)～8日(月)

場所: ブルゴーニュ地方の中心地ディジョン

講師: メリー・マリー ピアニスト: ジョージ・マクリナン

定員: 128名限定 費用: 1,495フラン(3万円)

締切: 1月15日

ブルゴーニュでメリー・マリーさんとSCD!魅力あるウィークエンドです。お問い合わせはセクレタリまでどうぞ。

都FD連行事でスコティッシュ・ダンス・タイム

東京都フォークダンス連盟の35周年記念大会が4月に行なわれます。インタナショナル・フォークダンス、日本民踊、アメリカン・ダンスに加え約2時間のスコティッシュ・ダンス・タイムが予定されています。

4月13日(土) 6:30～

東京体育館サブアリーナ(東京・千駄ヶ谷駅前)

講師兼フィドラーはバーバラ・マコーエン(3度目の来日!)

会費 ¥1,000(午前から一日中有効)

入場券入手などお問い合わせはセクレタリに。

指導者資格試験は再来年に

RSCDS の予算上、東京での指導者資格試験は1997年になるだろう、という本部からの再度の回答がありました。オーストラリアにおける試験が97年に計画されており、東京はそれにあわせて実施予定とのこと。委員会で brunch の対応をきめていきますが、セクレタリまでご意見・ご希望をお寄せください。

なお、RSCDS 本部・試験委員会の方針変更があり、予備試験・指導者資格試験を計画している brunch は、トレーニングを開始する前に日時・場所などを本部に通知し、承認を得なければならないことになりました（従来は試験の日時・場所の事前承認であった）。

RSCDS Bulletin No.73の概要

サーモンオレンジ色の表紙の新ブリティンを本号に同封しました。チェアマン、ジョージ・ローソンのことばが最初にあり、自己紹介と抱負が述べられています。もっと会員をふやそう、このブリティンを図書館、コミュニティ・センターや地域サークルに置こう、と述べています。ジョージの写真が不鮮明なのは残念。ジョアン・ムーアに代わってギル・パーカーがセクレタリになったこと、アラン・マクファーソンを本部アーカイビスト（記録文書係）に任命したことが今年のスポットライトです。

- 会員数は24,541名（昨年24,563）。長期会員数が300名減となっている。
- brunch 数は新たに米国アリゾナ州ツーソン・ brunch が加わって164となった。
- 関連グループ数506（昨年502）。
- 資格試験では、予備試験 受験者148人、合格者93人
指導者試験 受験者83人、合格者65人。
- 出版物については、ポケット版のBook 36-38を出版し、1996年に新ブック No. 39を出す予定で、この内容は古いダンスが4つ、新しいものが4つになるだろうと述べている。1997年に新出版物はないが、1998年には特別記念版を予定しているとのこと。レコーディングでは1995年に Book 18を完成し、今世紀の終りまでに、のこる Book 19から26の音楽を出したいとしている（5年間で8カセットのペース！）。1996年はBook 19 & 20 Musicが発売される予定。日本人会員の寄付によって新たに3枚のCDを出したこと、サマースクール1996でマニュアル追録版とビデオ版をリリースしたいとも書かれている。
- サマースクール1995の参加者は788人で、前年の890人から100人の減。日程が2週間うしろ倒しになったためか、英国人参加が100人減ったことがその要因であろう。日本人参加者は33人で、最多記録であった（過去最多は1991年の25人）。
- サマースクール1996は、例年の日程にもどって7月14日（日）～8月11日（日）に開催される。

- 各ブランチのウィークエンド・スクールの日程がのっている。ただしこれで全部ではなく、その後本部が受領した日程がある。（最新版が必要な方はブランチ・セクレタリにお問い合わせを）
- グレイム・ステーブンス ("Miss Nancy Arnott" の作者)
アレックス・T・クィーン ("Angus MacLeod" の作者)
アナ・ホールデン (RSCDSの実力者で、"A Trip to the Netherlands" の作者)
ユージェニア・カレンダー・シャープ (RSCDS の"Formation Index" の編集者)
に追悼文が捧げられている。

会費値上げ可決…RSCDS 年次総会

11月4日のRSCDS 年次総会で本部会費値上げが可決されました。クレメント篤子さん（東京ブランチ代表）から、トゥルーンで開かれた年次総会と、その後の執行評議会のレポートをいただきました。紙数のつごうから本号では年次総会の報告を掲載し、執行評議会のレポートは次号といたします。

AGM報告

クレメント篤子

オープン・フォーラム 議長：Bill Clement (300人以上は出席していたと思う)

- 1) サマースクールの参加者が年々減少傾向にあり、収入がへっている（一定数に達しないと大学にキャンセル料を支払わなければならない）。参加者から、宿泊・食事・ダンス・音楽・日帰り旅行など、アンケートをとったらどうか？
 - a) サマースクールに参加しない人たちから、アンケートをとったほうがよいのでは？
 - b) 何年かまえに実施した………7年前になる。
 - c) そろそろアンケートをとりなおしたら？
 評決：ほとんどの人が賛成を表明。
- 2) ケイリーという人が集まるのに、SCDだと人気がない。ダンスシューズにはき替えるだけで、それが障壁となっているのではないか？ 普通の靴でも踊れるよう教えるなり、少なくともティーチャーはこれらのことを認識する必要があるのではないか？
 - a) 普通の靴で踊ったら、女性は足が痛くなってたまらない。
 - b) 靴の問題よりも、ますます踊りが複雑化し、始めようとする人たちのやる気をなくさせているのではないか？
 - c) 体育館では普通の靴は禁止されている。
 - d) 柔らかい靴も固い靴も、どちらと規定せず、受け入れられるべきだ。
 - e) ハイヒールで踏まれたら男性はかなわない。ローヒールにしてほしい。
 - f) 靴が違ってても、踊りを楽しむことには変りがない。
 - g) どのようにしたらもっとRSCDS 愛好者をふやすことができるか——ということのほうが重要なのではないか？
 - h) 一般の人が参加したい気持ちになるよう、われわれは十分な努力をしているのだろうか？
 ☆コメント……1950年のサマースクール委員会（ミス・ミリガン議長）で、それまでハイランドダンスのように、Pas de Basque の第3ポジションの一方の足が、他の足にかぶさるよう

にしていたのと、ストラスペイの後ろからくる足が、前の足にこするようにして前方へ出していたのを、ヒールのある靴でも踊れるよう、今のように訂正された。

- 3) ソサエティと一般会員とにコミュニケーションの欠如がある。たとえば、24,000人の一般会員はきょうのAGMの議題さえ知らない。
- a) ソサエティからブランチ・セクレタリには連絡がいくのだから、各ブランチの責任である。
 - b) 個人で情報を独り占めして、他の人に伝えることをおこたっている。
 - c) 世界的な情報組織にインターネットがある。ほとんどの会員はこれを使うことはないかもしれないが、若い人たちはよく利用している。若い人たちにインターネットを利用して情報を流すのも一つではないか？
 - d) インターネットはすでに約 300人の会員に使われていて、毎日情報交換の場として活用されている。いま、この利用をはじめべきだ。
 - e) PR小委員会ではソサエティの75周年記念行事に関して意見・案をつのったが、反響がない……コミュニケーションの欠如！
 - f) ソサエティの規約改正についても情報がなく、どうなっているのか分からない。……弁護士の回答待ちで、こういったことには時間がかかる。
- 4) あるブランチの行事で、一般の参加希望者の郵便・電話での申込みが拒絶された。このようなことはなくして欲しい。
- a) われわれのブランチではだれでも歓迎で、どんな方法でも参加希望者を受け入れている。(同意見が多くてた)
 - b) ほかからのブランチ行事への参加は大いに歓迎である。
- 5) この数年、専門委員会への立候補者が少なく、選挙なしに委員会が構成されている。もっとたくさんの適任者が執行評議会にいるはずなのに、なぜ立候補者が少ないのか？
- a) 執行評議会に出たくても、ブランチレベルで参加を認めてくれない。
 - b) 各ブランチから執行評議会に代表を送るのではなく、直接専門委員を選び、執行評議会を縮小すべきだ。
 - c) レプリゼンタティブ(代表者)として執行評議会に出ているのだから、各委員会に立候補すべきだ。
 - d) 履歴書をつけ、それにより委員会に配分したらどうか？
 - e) 執行評議会に出席する人たちはすでに各ブランチの役員であり、それ以上の役割をこなすのは無理がある。
 - f) 各ブランチの役員以外の人を執行評議会に送ればよいのでは？
 - g) その意見に賛成。役員以外のほうが別の視点でものが見られる。
 - h) PR(Public Relations)が重要。
- 6) 夏期期間中、各ブランチの行事・イベントが一般の人たちには不明である。
- a) 夏のあいだアバディーンでは毎週ファミリー・クラスを開いており、たいへん好評である。
 - b) エディンバラ市の援助が得られなくなったプリンシズ公園のダンスも、ミス・ルアーズの努力で継続している。
 - c) クラックマナン州でも夏の行事にたくさんの参加者を得、友好的で楽しいイベントがくりひろげられている。
- ☆コメント……きょうのオープン・フォーラムの各質問を通して、コミュニケーションの必要性が強調されている。PR小委員会の活躍に期待するところで、そのためにも会員からの要望・希望を本部に連絡してほしい。

第66回 Annual General Meeting 年次総会

まず今回のAGM主催地のマクドナルド市長から、ウィットに富んだウェルカムのあいさつがあった。欠席届けが読みあげられ、チェアマンがソサエティ総裁であるクイーンからのメッセージを含むあいさつを行なった。

昨年のAGM議事録の承認後、新セクレタリの正式な任命があった。新セクレタリ、ミス・ギル・パーカーは、生まれはイングランドであるが両親はスコットランド人、幼小期を香港で過ごし高校からノース・ベリクに住み、いまSCDを勉強中、などが紹介された。出席者全員、暖かい拍手でミス・パーカーを迎えた。役員人事に移り、チェアマン：ジョージ・ローソン、副チェアマン：ビル・クレメントの再任が承認された。

新セクレタリから、コンピュータの導入、75周年記念行事準備（PR小委員会）、チャリティ法改正にともなう規約改正小委員会、7グループのアフィリエイテッド承認、チューター・コース、ミュージシャンズ・コース、などを含む年間報告がなされ（詳細はソサエティ・ブリティン参照）、承認された。

年間会計報告（95年は£11,504の赤字）がリチャード・ターンブル財務委員長からなされ、承認された。出費節約がなされていないという質問に対して、この財政状況を改善するためには、根本的に見直しする時期にあることがつけ加えられた。またサマースクールは、直接出費のみで、運営にかかわる事務的経費は含まれていないこと、現金預金£221,801はサマースクール前納金を含むため、余裕があることではない、とつけ加えられた。

決議事項：

a) 『ソサエティは将来にわたり慈善体制を継続する』

チャリティ法改正にともない論議が続けられてきたが、一度チャリティの看板を下ろすと再び慈善団体資格をとるのが困難なこと、“Royal”のタイトルを失う恐れがあること、消費税・税金の問題等が列挙され、可決された。

b) 上記への修正提案『ランチは自立した存在である。慈善団体申請を希望するランチは、本部の援助を求めなければならない』

ランチが独立形態をとらないと、世界中の164のランチは同時に会計報告を提出しなければならない。これは不可能である。また、すべての収入（会費・講習会・パーティ収入等）が本部会計の一部とみなされ、消費税支払対象となってしまう。こういった不都合を避けるために独立形態をとることが確認された。各ランチは、現在慈善団体資格をもっていないので、その申請が必要である。イングランド、ウェールズはスコットランドと法律を異にしており、複雑な問題が絡むため本部の助言に従うべきとのことから、原修正提案の“may”を“should”に変えて可決された。慈善団体資格がない場合、すべての財産を本部または同類の団体に引き渡す必要が生まれ、十分な考慮を要する（海外ランチは非対象）。

ただしランチが自立するといっても勝手なことができるわけではない。あくまでチャリティ法改正に対処するためであり、いままでの本部とランチとの関係に変わりはない、おのおのがSCDのInternational Familyの精神を失わないよう強調された。

c) 『年会費は6ポンド、その100パーセントを本部納めとし、ランチは0パーセントとする』（現行7ポンドでその60パーセント（£4.2）を本部納めとし、ランチに40パーセント（£2.8）を配分していた）

d) 『長期会員会費は60ポンド、その100パーセントを本部納めとし、ランチは0パーセントとする。この場合の会員有効期間は10年とする』（現行70ポンドで、60-40で配分）

ブランチが独立形態をとるため、いままでのように60パーセントを本部、40パーセントがブランチという分配ができなくなった。規約改正なしに会費を値上げするため、上記のように変更され、可決された。[東京ブランチにおける会費値上げについては本稿末尾をご覧ください]

e) 『アフィリエイテッド・グループ会費20ポンド』は賛成多数で承認された。

f) 『チェアマンおよび副チェアマンの任期を2年とする』

チェアマンになると、副チェアマン(3年)→チェアマン(3年)→リタイア後の相談役(1年)計7年間、ソサエティに拘束される。これを2年・2年・1年の計5年とする提案で、他の専門委員長任期が5年と決められたので、これに準じる。このほうがなり手が多く、集中してよい仕事ができるはず、という理由から(いままでのチェアマンがそうではなかったということではない)、賛成多数で承認された。

g) 『執行委員選出方法に順位つき複数投票方法を導入する』は、ソサエティは赤字削減に取り組んでおり、£150の費用がかかる方式はいまは不要、ソサエティの体質を考へても不要との意見が強く、却下された。

以下の人にソサエティ感謝状が渡された。

Mrs Vira Davidson - Edinburgh Mrs Nancy Dickson - Carlisle
Mrs Betty Spires - Canada Mrs May Yarker - Thurso

執行委員(6人)の選挙結果はつぎのとおり。

Dorothy Hamilton (Glasgow) Alastair Aitkenhead (Ayr) Norah Dunn (Dumbarton)
Stewart Adam (Edinburgh) Pat Gormley (Isle of Skye) Jim Healy (Perth)

来年のAGMは11月2日、ダンディーで開催が確認され、今回の主催者に謝辞がのべられて、17:50、3時間20分にわたる長時間のAGMが終了した。

[本部会費値上げに対するブランチ委員会の考えかた]

現行：本部会費 £7(¥1,400)	┌ 60% £4.2(¥700) 本部取り分 └ 40% £2.8(¥700*) ブランチ取り分	本部会計へ
		ブランチ会計へ
ブランチ会費 (¥1,400)		ブランチ会計へ
計 ¥2,800		
改正案：本部会費£6(¥1,000)	100%(¥1,000)	本部取り分 — 本部会計へ
ブランチ会費 (¥2,100)	=(**¥700)+(¥1,400)	ブランチ会計へ
	**現行£2.8のブランチ取り分相当額	
計 ¥3,100		

いままで本部会費を£7として徴収していましたが、ブランチ年会報 NO.12(1995)の8頁および10頁にあるとおり、そのうちの40%は(為替差益を含んで)ブランチ会計に残っていました。本部年次総会決定は£6全額を本部に納めるものです。

ランチ財政に余裕はあるものの、これはおもに資料・カセット等のランチショップ売上げによるもので、会費収入だけでは印刷費・郵送料をまかなうのが精一杯です。会費値上げなしで、繰越金（各家庭の預貯金にあたる）から今回の値上げ分を負担すると、年間約10万円を取崩すことになります。

会費額は本来ランチ総会で審議されるべきものですが、今回の値上げは本部における決定であるため、ご了承をお願いするものです。

会員各位のご意見を各ランチ委員にお寄せください。

東京における新ランチ設立、さらに議論が必要

前号のランチレターで、新たなランチを東京につくりたいとの東京スコティッシュ・ブルー・ベル・クラブ（代表：内藤愈吉生さん／セクレタリー：岡田昌子さん）からの書面申し入れがあったことをお知らせしました。

本件について、現時点でのランチ委員会の意見は、『賛成しかねる。ランチ会員が納得できる明確な結論を出すには、さらに時間を要する』です。

理由：1. 一地域一ランチのRSCDS ルールがあるのを承知しながら、これに逸脱する申請に対して同意は困難である。RSCDS ルールを越えてまで、東京を同心円とする新たなランチをつくる必然性があるか疑問である。

2. できるだけ多くの東京ランチ会員が参加できるよう、行事を運営していかねばならないが、勤労者の参加が困難な日取り・時間帯にランチ行事を実施したとは認識していない。

新ランチ設立でなく、現ランチにおいてともに積極的に行動され、ランチ活動をさらに活性化させていただきだい。

3. 新ランチ設立を想定した場合、会員・非会員を問わず、そこに混乱・不和・不信などが起こらないようにするには、さらに時間をかけた検討を要する。本件についてランチ委員会のみで結論を出すには問題が大きく、全会員が納得する形で結論を出すことが必要で、そのためには公の場の論議（総会等）が不可欠である。

日本にたくさんのランチが生まれ、RSCDS 精神にのっとり特徴ある活動をし、あるときは協力して大きな行事を実施できれば素晴らしいと考えています。現在はさらなる発展の過渡期といえるかも知れず、不十分な議論のまま早急な結論を出すことは、将来に大きな禍根を残すのでは、と懸念しています。

SCDクイズ（最終回）

マナー編その2です。つぎのうち正しいと思われるものに○、疑問と思われるものに×をつけ、はがきで下記あてお送りください。

〔問題〕 (解答記入例：1-×, 2-○、……)

1. 一郎さんはそのパーティで"Sugar Candie"を踊りたいと思っていた。その番になったがMCがもたもたしている。じらされた一郎さんはパートナーをつれてフロアに進み、MCに無言の催促をした。
2. パーティで、つぎの踊りは"Scottish Reform"、Recapのみとプログラムにある。三郎さんは2nd coupleだった。1st coupleは女性どうしで、三郎さんに「自信がないので1stと2ndを代わってくれませんか」とたのんだ。三郎さんは「いや、トップからつめるのがきまりですから」といって、位置を変えなかった。
3. 正夫さんのセットにビギナーがまじっていた。正夫さんはビギナーに小さな声でつぎのフォーメーションを告げたり、身振り手振りで方向を示したりした。あとで正夫さんは先輩から「あれはいけない。SCDで許されるのは目のうごきだけだ」といわれた。この先輩の意見は正しいか。
4. 俊夫さんのグループの5回目のSCDパーティである。壁にいろいろな飾りつけをし、そのなかに英国国旗(ユニオン・ジャック旗)を掲げた。それを見た先輩は俊夫さんに「これ、あまりよくないよ」といった。先輩の意見は正しいか。

解答宛先：222 横浜市港北区篠原北 1-28-25 鳥山豊喜

締切り： 96年1月25日(消印有効)。

賞品： ひろげると畳大になるミシュランの四十万分の一スコットランドマップを3名に。正解多数のときは抽選。

発表： 次号ブランチレター。

前号第6回のクイズ正解は、すべて『×』。下記の正解者にバンクーバー・ブランチのポロシャツをお送りしました。

渡辺金次郎(仙台市)・谷本久実(福岡・春日市)

[解説]

設問1. SCDにおいてフロアは社交の場所であり、ガムをかみながらのダンシングは相手に対して失礼である。スコットランドの伝統にガムはない。ガムをかむことによって集中力がうすれ、ダンシングにおいて、やらなくていいミスをすることになる。餃子はダンシングのあとにするべきである。

設問2. どちらが女性役をやるか、背の高さできめていたら、上背のある女性は男性と組まないかぎり長時間男性役をやり続けることになる。ベテランの女性ダンサーは、じゃんけんで、あるいはむしろ積極的に『わたしが男をやるから踊りましょう』と振る舞うべきである。むかし、男性が圧倒的だった時代、男どうしが組んで、背の高いほうが女性役をやるのは不思議でも何でもなかった。

設問3. 男女を逆にしてみよう。『ほく、女性役しかできないんです』という男がいたとしたら……男女バランスのとれたグループは数少ない。女性は男女両役をつとめるのが(悲しいけれど)現実である。

設問4. のこり時間がないんだから、踊りをカットするのはしかたないんじゃない? という理由で「○」を解答としたかたが多かった。出題者の考えはこうである。

パーティにやってくる人の第一の目的は踊ることであり、食事・デモ観賞はそのつぎである。ダンサーを踊らせないのはおかしいし、カットされたダンスがめあてで、パーティ後半を楽しみにしていた人を落胆させることになる。パーティ・プランナーはプログラムにあるダンスをすべて消化できるよう、食事・デモの時間を配分し進行させなければならない。目一杯曲目をつめこんでカットするより、少なめに選曲して予備のダンスを用意するほうが賢明なプランナーのやりかたである。ウォークスルーつきの場合、1時間6曲を標準としてプログラム全体を計画すること。

STRESS TESTED 1995

中田多鶴子

サマースクールでPreliminary Examination のためのトレーニングクラスに参加しました。どんな人達がクラスに集まるのか、これから2週間、クラスに慣れて受験までこぎつけるかなど、不安な材料が頭をよぎり、特に初日は朝から緊張気味でした。

クラスは、オランダ、フランス、アメリカ、カナダ、スコットランド、イタリア、日本から1名づつスイス2名、イングランド5名、合計14名の国際的な雰囲気です。スタートしましたが、3日目で1名リタイア、計13名になりました。年齢は20代から50代後半まで幅広く、孫のような人と一緒に受験するようだと言っている人もいました(でもこの人のステップは誠に軽やかでした)。ティーチャーは厳しさの中にも愛情が満ちあふれた素晴らしい人柄のエルマ・マコースランド、ピアニストはアリス・マン、こちらの指示に対してにこやかな笑顔で演奏してくれるおばあさまです。

フランス人のセリーヌと私以外は、英語が母国語です。「母国語で試験を受けることですら大変なことなのに勇気があるね」とクラスメートに言われ、日増しに『大変な事にチャレンジしている』ことが私の心の中で大きくなり、その重圧に押しつぶされそうになりました。

2週間のトレーニング期間中にクラスでティーチングの練習ができるのは、たった3回、あとはクラスメートのティーチングとそれに対するエルマのアドバイスをメモし、その日のうちに、英語の表現方法を含め、自分のものにしなければなりません。ピアニストに指示することや、すべてを英語で説明しながら教えることは日本では練習せず、セントアンドリュースに来て初めて経験したことなので、それに慣れるのに苦労しました。

1日のスケジュールは日によって多少違いはありますが、食事、ダンスそしてダンスの勉強を交互に繰り返しているといったものでした。

7:00	起床
7:45 - 9:00	朝食
9:30 - 12:40	クラス

12:50 - 14:00	昼食
14:00 - 15:30	クラス（クラスがあるのは受験生のみ）
16:00 - 18:00	自由時間（勉強と休息）
18:30 - 20:00	夕食
20:15 - 24:00	ソーシャルダンシング、宿題、クラスメートと勉強（時々ワインつき）または一人で勉強

試験は、2週目の後半3日間でした。

1日目：筆記（1時間半。ダンスの理論について。A4サイズの内紙を何枚使って答えてもよい。私は3枚使いました）

2日目：ダンシング（課題曲12曲の中から、ストラスペイ1曲・リールまたはジグ1曲をリカップし、ファーストカップルで踊る。私はにこやかに踊ることを心掛けました）

3日目：ティーチング（ステップ、フォーメーション、ダンシング（16小節）を20分で指導する。これもにこやかに教えることを心掛けました）

トレーニングの期間中に足を痛めた人（オーバーウエイト？）、足の古傷が痛みだした人、ストレスによる頭痛でドクターストップがかかった人など、皆それぞれ肉体的にも精神的にも苦労したようでした。おそろいのTシャツ（STRESS TESTED 1995と書いた）をつくり、ダンシングの試験をコミカルに再現した出し物をクラスで企画し、試験勉強の合間に練習し、Ceilidhで演じました。皆の笑いをさそってストレスを忘れました。

おかげさまで、私は合格することができました。

トレーニングティーチャー、ピアニスト、励ましあったクラスメートを始め、日本でのティーチング指導とセントアンドリュースのトレーニング期間中、見守っていただいた五十嵐成子さん、いろいろアドバイスくださった諸先輩、そして斎藤 信さん始め一緒に勉強していただいた仲間の皆さんに感謝いたします。これから試験に臨まれる方は、いつでもご連絡ください。お役にたてれば幸いです。

サマースクール三訪ノリオンSCDグループ訪問記 岩崎誠司

9年ぶりにSt Andrewsのサマースクールにいきました。過去2回は、1984年のプレリミナリ試験、1986年のフル・サティフィケート試験だったので、今回はおもしろい楽しむことを主眼での参加です。おおよけには東京ブランチのチェアマンなので、役務として本部や他のブランチのスタッフ、教師、メンバーとのロビー外交も別の大仕事でしたが、まずは自分自身おもしろい踊ることを楽しみました。9年前、ともに苦労したクラスメートのノエル（パリ・ブランチの現セクレタリ）、トリッシ（ダンディー・ブランチ）、ジェリー（パリ・ブランチの設立者でいまは在ロンドン）など、かつての仲間と会い、踊ったことがとても感激。

そして大きな収穫となったのは、ティーチャーズ（指導者資格）クラスでした。ウェルカム・パーティ等で、本場で踊るダンスは楽しいと堪能しながら、つい教師の眼で他のダンサーを見ていると正直なところ、それぞれの技量が分かります。この人はすごいと思うと、そういった人達はほとんどティーチャーズ・クラスにいるのです。これは当然といえば当然なのですが、するとこちらもクラスでしっかり踊る、相手もおなじ頑張りをつくしているのがいい雰囲気伝わってくる、こちらはさらに頑張る。それが一曲一曲すごい充実感で、これはここだからできるのだ、ととても満足しました。このように楽しくかつ精一杯充電するからこそ、日本へ帰って次の年までランチで放電できるのかもしれない、以前松橋順子さんがそうおっしゃっていたことがあります、十分に納得できました。たいへん贅沢なことだと思います。

それから、幸いなことにヤンガーホールでのカントリー・ダンスのデモ・メンバーに指名され、出場したこともおおきな充実のひとつでした。デモンストレーションははじめてではないのですが、やはりこれは名誉なことだと思っています。本部スタッフのデモ・メンバーも含んだ各国混成チームで、レスリー・マーチンの厳しい指導のもとでの練習はとても勉強になりました。本番はあの広いフロアで1セット。大きく踊るので気持ちいいのですが、それよりもしっかり踊り切るための緊張感がなんともいえないわけで、チームが一つに呼吸を合わせる無言の意思疎通、そんな充実感がすばらしいと思います。パートナーだったドイツのカリンに感謝です。

そんなこんなで、1週間はめくるめくすぎて、また来年も当然ここ（サマースクール）に帰ってくる気になっている自分に気がついた次第です。私は十分満足しているのですが、そのぶんいろいろな人にご迷惑をかけているかもしれません。紙面を借りて感謝する思いです。

サマースクールから約1か月後の9月中旬、仕事でヨーロッパに出張した際、サマースクールで知り合ったメンバーを頼りに、フランスはリヨンのグループのクラスに参加しました。昨年も出張に合わせてロンドンおよびパリ・ランチのクラスに参加した（ランチレターへの原稿は紙面のつごうで没になりました）のですが、今回もなかなか興味深いものがあり、その一部をご紹介します。

リヨンはパリにつぐフランス第2の都市、ルネサンス時代はフランスの首都として栄え、今も当時の建物が町並みに残っている美しい街です。

まず、当日迎えに来てくれたリヨン・グループ(Groupe de Danses Ecosaises de Lyon - La Chanterelle)のナディンと会場の学校へいってみると、そこが使えない。ご承知のとおり、今年は核実験でフランスは世界の嫌われもの、国内でも評判が悪いばかりでなく、パリを中心に大都市は爆弾テロが多発し、ベレー帽の特殊部隊が街なかをうろうろしている状態です。パリの小学校で爆弾テロが起こり、授業終了後はすべて閉鎖されて使えなくなったのです。グループのスタッフはあわてて別の会場を探しだし、結局はすごい（どういう意味かはお察しください）、体育館でクラスが始ま

りました。体育館はコンクリートむきだし、どこかのバンドが使っていた雰囲気がありました。

3セットくらい的人数で、男性は三分の一程度。だれもキルトははいていません。教師さえ普段着のままでアットホームな雰囲気です。そして、クラスはもちろんフランス語です。日本ではダンス用語は基本的にそのまま使うようにしていますが、ここではダンス用語もすべてフランス語になっています。こんな具合です。

英語	フランスでの使い方	日本語的使い方
First Couple	Premier Couple/プルミエ・クール	1組さん
Reel of Three	Quadrille de trois/ カドリール・ド・トワ	リール・オブ・スリー
Turn Right	Tournure droit/ ツルネ・ドワ	右手ターン

という感じでしょうか。最初は「おとっと」でしたが、フランス語の語彙に気がつき、ついていけるようになりました。フランス人は自国語に対してプライドが強いのはご存じのとおり。でも理解できる感じをつかむと、いいフランス語の勉強ということで、それなりに楽しかったです。

日本でも、以前はかなり日本語的使い方で行っていましたが、東京ランチではダンス用語として英語をそのまま使ってきましたから、海外から講師がきたり、あるいはサマースクールへ行ってもダンス・クラスは最小限理解できるレベルにあると思います。フランスでも英語読みのダンス用語を使ってほしいところですが、用語のつながりはとうぜんフランス語・フランス文法ですから、日本人のような外国人にはかえって混乱するかもしれません。とにかくユーモアのある楽しいクラスでした。

前期サマースクールにはリヨンから9人参加していたそうで、そういえば何人かは見たことがある顔でした。それから、後期のプレリミナリ試験に合格した娘さん（セリーヌという名前で、中田多鶴子さんとおなじ試験クラスだったはずです）も頑張っていて、これからが楽しみなグループでした（リヨンは、まだランチとなっていない）。クラス終了後はこれからどうやって会場を確保していくのか、とまじめな議論になり、早口のフランス語にはまったくフォローできませんでした。ナディンに夜のリヨンを案内してもらい、おいしい食事とワインを楽しんだ次第です。

いろいろな出会いと人々の暖かみ、そしてともに踊ることの楽しさを与えてくれる RSCDS インタナショナル・ファミリーの存在に感謝しました。

誤記訂正

前号ランチレターNo.30, 3頁

小谷野千枝子さんの住所を豊岡市→入間市に訂正します。

新ダンスブック紹介

"TACNOTES '95"

カナダ指導者連盟(Teacher's Association (Canada))から"TACNOTES"の95年版が発行された。"TACNOTES"は、RSCDS Bookの解説文では不明確な箇所をTACが補足説明した資料で、RSCDSのマニュアル第7章よりさらに細かく注意点を述べている。従来の86年版は、RSCDS Book No.33 (1985)まで解説していたが、95年版ではBook No.38 (1994)まで述べている。

例: Machine without Horses" (Book 12)

RSCDS Manual; Bars 17-24 1st and 2nd couples give nearer hands.

TACNOTES '95; 17-24 Nearer hand leading for both cpls. 2nd cpl dance straight into place on bar 24.

サイズは大型(A4相当)で58ページある。本文(中身)のみなので、ファイルするには米国式3穴バインダが必要。各ページの穴は補強されている。RSCDS Book番号順に記載されているが、すぐ参照したいときのために、インデックスをつけるなどの工夫を要する。この"TACNOTES"もRSCDSからみればローカル・プラクティスであり、この本を引合いにしてRSCDSの先生たちと論争するのは避けたほうが賢明である。

[注文略号 タックノーツ 送料込¥800]

郵便振替で 00170-8-160278

鳥山豊喜 までお申し込みください。

締切り: 96年1月8日(月)(消印有効)

現品お渡し: 3月下旬予定

ロバート・バーンズ切手

1996年はロバート・バーンズ没後200年にあたり、スコットランド各地でさまざまな催しが計画されています。英国郵政公社もバーンズの誕生日、1月25日に4種類の記念切手を発行します。図柄はバーンズの詩の一節と、それにちなむイラストレーションとなっていますが、原稿締切り時点では詳細不明です。つぎのとおりバーンズ切手をお取り次ぎいたします。いずれも送料込み。

切手4種完(ミニ袋入り) ¥400

切手拡大絵はがき4種完(切手をそのまま絵はがきに拡大したもの) ¥350

初日カバー(切手4種を1封筒に貼り、ダンフリーズ局の消印を押したもの) ¥500

解説カードパック(切手4種と解説カード) ¥500

解説ブック(A5判16頁のブックレット。切手はついていない) ¥700

英国切手は日本で通用しないため、絵はがき・初日カバー・解説カードバックをおすすめします。

なにがほしいか、いくつほしいかをはっきり書いて、

郵便振替で 00170-8-160278

鳥山豊喜 までお申し込みください。

(タックノーツとの同時送金可)

締切り： 96年1月8日(月)(消印有効)

現品お渡し： 2月下旬予定

ブランチショップ案内

例年のとおりブランチショップを開店します。商品の内容と値段はブリティンNo. 73 の35~41頁をご覧ください。注文書用紙は本号に添付しました。今回のお勧め品は、

○#RSCDS 51 Music for Book 18……コリン・デュアー・バンド演奏で、『良い演奏』という世評。サマースクールで入手した会員が多かったので、前号ブランチレターではご紹介を略した。未入手の方はこの機会に。8ポンド。

○#RSCDS CD3~5 Scottish Dance Favourites……このCD 3枚は日本人会員安村きみ子さんの篤志(ご主人の遺志を寄贈)によってできあがったものである。いままでに録音されたマスターテープ演奏のなかから本部がピックアップし、3枚にまとめられた。CD3(Volume 1)はBook 12-17, Volume 2はBook 27-32, Volume 3はBook 33-36までの演奏が収められている。『"Bonniest Lass in all the World"なんてなじみのない曲が入っている代わりに、"Duke of Atholl's Reel"が抜けている』という評もあるが、いろいろのバンド演奏が楽しめる。『RSCDSのカセット全曲はいらないけれど、いくらかは手に持っていたい』人にも好適である。

1枚10ポンドであるが、CD3~5をセットで買うと25ポンドでよい。

○Scotland through her Country Dances……本号掲載の「1745年事件とSCD」はこの本によるところが大きい。もちろん全文英文。8.5ポンド。

資料、音楽、アクセサリを入手ご希望のかたは本号20頁の注文書に必要事項を記入され、セクレタリにお送りください。代金は郵便振替でお願いします(合宿会費と同時送金可)。

1. LPは国内配送困難なため、ご注文はご容赦ください。
2. 音楽テープはカタログ右端のテープ番号を併記してください。
3. ビデオは日本ではVHS NTSCのみが再生可能です。
4. 申込み締切：95年1月19日(金)消印有効
現品発送は4月上旬の予定です。

250年前、チャールズ・エドワード・スチュアート（ジェイムズ7世／2世の孫にあたる）が無謀にもスチュアート王家の再興を宣言してグレンフィナンで軍旗を揚げ、南部に進軍を開始しました。この1745年の反乱は、スコットランドに悲劇的な結末をもたらしたわけですが、物語はいまだ音楽に、歌に、ダンスに生きつづけています。スコットランド史において、これほどよく知られ、語り継がれた伝説は、これ以外にありません。RSCDSの出版物も例外ではないのです。The Eight Men of Hoidart" に始まり、"Over the Water to Charlie" まで、熱心なダンサーならこの「若き騎士」と悲運の同志たちの行程をリール、ジグ、ストラススペイでたどることができるでしょう。

1745年事件の背景はよく知られています（注1）。フランスを船出したボニー・プリンス・チャーリーは、1745年7月25日モイダートに上陸しました。はじめ彼の大義にたいして不承不承であった数クラン（氏族）から誓約を得ると、彼は千人の賛同者を率いてエディンバラに向かいました。行く先々で同志がふえてゆき、9月、アレクサンダー・バズでジョン・コープ卿（ここにも歌の名があります）指揮のイングランド軍を打ち破ったのです。11月、ジャコバイト軍（注2）は国境をこえて南進し、イングランドのダービーに達しました。けれども、離脱者の続出、イングランド側ジャコバイトの結集化失敗、フランスにあったイングランド正規軍の戦線復帰の知らせによってジャコバイト軍は退却に転じました。

北に向かう途中の小競り合いでは勝ったものの、ついに彼らはカロードンでカンバランド公が率いるイングランド軍に追いつかれました。このときのイングランド軍は、ドイツ人傭兵とハノーバー王家に忠実なスコットランド人から成っていました。1746年4月16日、イギリス本土内での最後の大きな戦いで、イングランド軍の習練を積んだ銃口が、勇敢なジャコバイトたちに向けられたのです。戦死した数百人、追跡され殺された人、処刑された人を置き去りにして、ボニー・プリンス・チャーリーは逃れました。その後5か月間、チャールズは海をわたってスカイ島に逃れたり（たぶんフローラ・マクドナルドとともに）、また本土に戻ったりして、かろうじてそして運よく逮捕をまぬがれ、1746年9月21日フランスに舞い戻りました。このあいだにスコットランドではキルト着用を禁じられ、バグパイプ廃棄が命じられました。

この反乱がなぜ大仰にさわがれるのでしょうか。当時チャールズは二十代前半であり、容貌も端正であったからでしょう。初期の成功と南への進軍が、ハイランドの支持者たちを楽観論で満たしたのです。でも終りは悲惨でした。1745年がなぜこんなにけた外れの記念事となっているのか、理解に苦しむところがあります。ハイランドが得たものは悲惨でしかなかったのです。スコットランド対イングランドの紛争であったなら、このようにはならなかったでしょう。スコットランド人のほとんどは、ジャコバイト派ではなかったのです。

いまなお心情は生きつづけています。おそらく、勇敢な戦死者を悼む気持ちからでありましょう。あるいはイングランドのアーサー王のように、ある日プリンス・チャーリーが海を越えてふたたびやってきて、なにかいいことをやってくれるのを心に描いているからでしょうか。あるいは新しさよりも、古きよき日を懐かしむ郷愁からでしょうか。理由はどうあれ、1745年は生きつづけています。たとえばSCDを見てみましょう。RSCDSがいままで出版したダンスで、1745年事件に関連するものはつぎのようになります。

The Eight Men of Moidart (Book 3)

これはいうまでもなく、1745年 7月25日モイダートに上陸したプリンス・チャールズ・エドワードと彼に従った7人を指しています。

1. タリバーディン侯ウィリアム。元アソル公爵。1715年のジャコバイト蜂起を支持したため爵位を剥奪された。
2. サー・ジョン・マクドナルド、富裕なアイルランドの軍人。
3. アンガス・マクドナルド。
4. サー・トマス・シェリダン、プリンスの後見人。
5. フランシス・ストリックランド大佐、プリンスの後見人。
6. ジョン・ウィリアム・オサリバン大佐、アイルランドの軍人。
7. ジョージ・ケリー、アイルランド人。

Twenty First of September (Book 17)

1745年 9月21日はアレクサンダー・バズィン戦の日で、1年後の 9月21日はプリンスがスコットランドを離れ、フランスに向けて出帆した日です。Book 17 は"softness and relaxation" をテーマとしていますが、私は後者のほうがより適格と考えます。

The White Cockade (Book 5)

コケイドは帽子につけるバラ花飾りで、白はジャコバイト、対する黒はハノーバー王家を示していました。

Culloden's Fancy (Book 5)

1746年 4月16日の惨劇を心にとどめるにはあまりに信じがたい標題です (Fancy=きまぐれの意あり)。奇妙なことに、ダンスもわずか16小節しかありません。進軍をまえにいつとき停止しているように思えるところもあり、これはハイランド将兵の突撃を現わしているのかも知れません。

Over the Water to Charlie (New Way) (Book 34)

この踊りは1750年のダンス資料から採ったものです。血なまぐさい反乱のわずか二、三年後には1745年の物語が人々の心に抱かれたことが、題名に示されています。

The Duke is Welcome to Inverness Or

Lady Macintosh's Rant (Book 3)

1754年ごろに出版されたダンスです。おなじ踊りに、相反する二つの題名がつけられています。ザ・デュークとはカンバランド公その人であり、虐殺者・屠殺者としてハイランドでは歓迎されざる人物なのです。いっぽうのレディ・マッキントッシュはジャコバイト支持者で、プリンスの大義に応じて二つの大隊を編成し、「アン大佐」と呼ばれたほどの女性です。

Lochiel's awa' to France (Book 15)

カメロン家のドナルド・ロヒールのことです。すぐれた判断力の持ち主で、反乱に加わるよう強く説得された人でした。プリンスはカメロン家の参加を人々に訴え、ロヒールが一度呼びかけるとジャコバイトの旗のもとに数百人が馳せ参じるほどでした。彼はカロードンで重傷を負いましたが、プリンスとともにフランスに脱出しました。

Ye're Welcome, Charly Stewart (Book 7)

毎年、カロードン戦の記念日にエディンバラのイングランド人将校は、キャノンゲート劇場でジグ“カロードン”を演じるよう命じました。伝えられるところによれば、彼らはそこでこのYe're Welcome Charly Stewart”を声高に叫んだということです。

RSCDSのダンスで 1745/46年事件に関係するものをざっと述べました。RSCDSダンス以

外ではつぎのようなものがあげられます。

Culloden Moor
Fifteen and Forty Five (原文のまま)
Hey Johnnie Cope
Jacobite Sword Dance
King Over the Water
Prince Charles of Edinburgh
Prince Charlie's Reel
The Young Chevalier

そしてFlora McDonald's Fancyです。

この概略史を述べるにあたり、私は主としてジョージ・エマーソンの労作"Scotland Through Her Country Dances" から多くを引用しました。彼の研究はまじめな小論文で構成され、まことに信頼に足るものです。また彼はYe'll aye be Welcome Back Again (Book 7) (バーンズによる同名の歌あり) は、おそらくボニー・プリンス・チャーリーのことを歌ったものではないだろう、と指摘しています。[From London Branch Newsletter "the reel" No.213, September-November 1995]

注1. 英国においては周知の歴史であっても、日本人にはなじみがない。概略を以下にする。

- 1603 イングランド女王エリザベス死去。スコットランド国王ジェームズ6世(スチュワート王家)がジェームズ1世としてイングランド国王をかねる。
- 1688 カトリック擁立のジェームズ7世(イングランドではジェームズ2世)、反カトリック派が支持するメアリ2世&ウィリアム3世軍のイングランド上陸でフランスに亡命(無血革命)。
- 1692 ウィリアム3世への忠誠が明らかでないという名分でマッキアン・マクドナルド家に対するグレンコー私闘事件起こる。
- 1707 イングランドとスコットランド両王国の連合によるグレート・ブリテン連合王国成立。
- 1714 メアリ2世の妹、アン女王(スチュワート王家)他界。子がないため連合王国は遠縁のハノーバー王家(ドイツ)からジョージ1世を迎える。ジョージ1世は英語を話せず。
- 1715 ジェームズ7世の子、ジェームズを支持するジャコバイトの反乱失敗。
- 1745 ジェームズの子、チャールズがスコットランドに上陸。なお1745年は日本では延享二年にあたり、11月に徳川吉宗は子の家重に將軍職を議っている。
- 1788 プリンス・チャールズ、ローマで客死。68歳。

注2. ジェームズのラテン語名がヤコブ(Jacob)。ジャコバイトJacobiteとはジェームズ7世/2世支持者つまりカトリック支持者ないしスチュワート王家派となろうか。

事務局から

- 前号ブランチレターでご紹介したビデオ&カセットは、準備総数55本にたいして136本のお申込みがありました。10本の Hogmanee・ビデオに、32本の注文です。急遽版元に追加注文しましたので、入荷次第お送りします。
- 映画「ブレイブハート」をごらんになりましたか。メル・ギブソンがウィリアム・ウォレスを演じ、久々の大活劇映画でした。これも映画向きの物語になっていましたが、「ロブ・ロイ」よりは面白かったですね。一見をおすすめします。
- 例年どおり RSCDSサマースクール1996の申込書を取りよせます。ご希望のかたはセクレタリまで電話、はがきでお申し越してください。本部からの入手予定は1月上旬です。
- 1745年のプリンス・チャーリーの蜂起、スコットランド・ファンとしてプリンス・チャーリーに肩入れしがちです。今回の読み物は客観的に見た1745年事件で、こういう考え方も知っておいたほうがよい、ということで掲載しました。

RSCDS 東京ブランチレター 1995.12.25発行

R S C D S 東京ブランチ

セクレタリ 掛川純子 0480-33-3494

345 埼玉・宮代町宮代台 3-4-14

この用紙を切り取るか、コピーして注文書としてください。

RSCDS 東京ブランチ事務局 御中

Branch Shop
注文書

下記のとおり注文します。代金は郵便振替により送金します。

氏名： _____ ☎ _____

☎ _____ 住所： _____

所属グループ： _____

品名	単価(ポド)	数量	金額(ポド)	レート	金額(円)
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
				220	
合計				220	

郵便振替口座 00160-9- 64023 RSCDS東京ブランチ
(〒345 埼玉県宮代町宮代台3-4-14 セクレタリ 掛川純子)